松本市文化財調査報告　No.109

KITAKURI

松本市北栗遺跡

―― 中部電力㈱鉄塔移設に伴う第２次緊急発掘調査報告書 ――

1993.3

松本市教育委員会

序

松本市西部に位置する島立地区は、長野自動車道建設、ほ場整備など開発に伴う発掘調査が数次にわたって行なわれ、各時代にわたる遺跡の分布が確認されていた地域です。このたび長野自動車道脇の当地に中部電力㈱島立電力所の鉄塔移転工事がかかることとなりました。そこで松本市では中部電力株式会社長野支店より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施することにより、遺跡の記録保存を図りました。

発掘調査は市教委の委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成4年7月から8月にかけて行なわれました。その結果、平安時代の竪穴住居址1軒のほか、中世以後と見られる遺構を発見し、また同時期の遺物を得ました。これらの資料は、今後地域の歴史解明に大変役立つものと思います。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、猛暑のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた中部電力の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月　　松本市教育委員会　教育長　守屋立秋

例　言

1．本書は平成4年7月24日から8月18日にかけて行なわれた、松本市大字島立北栗（しまだちきたくり）4323に所在する北栗遺跡の緊急発掘調査報告書である。

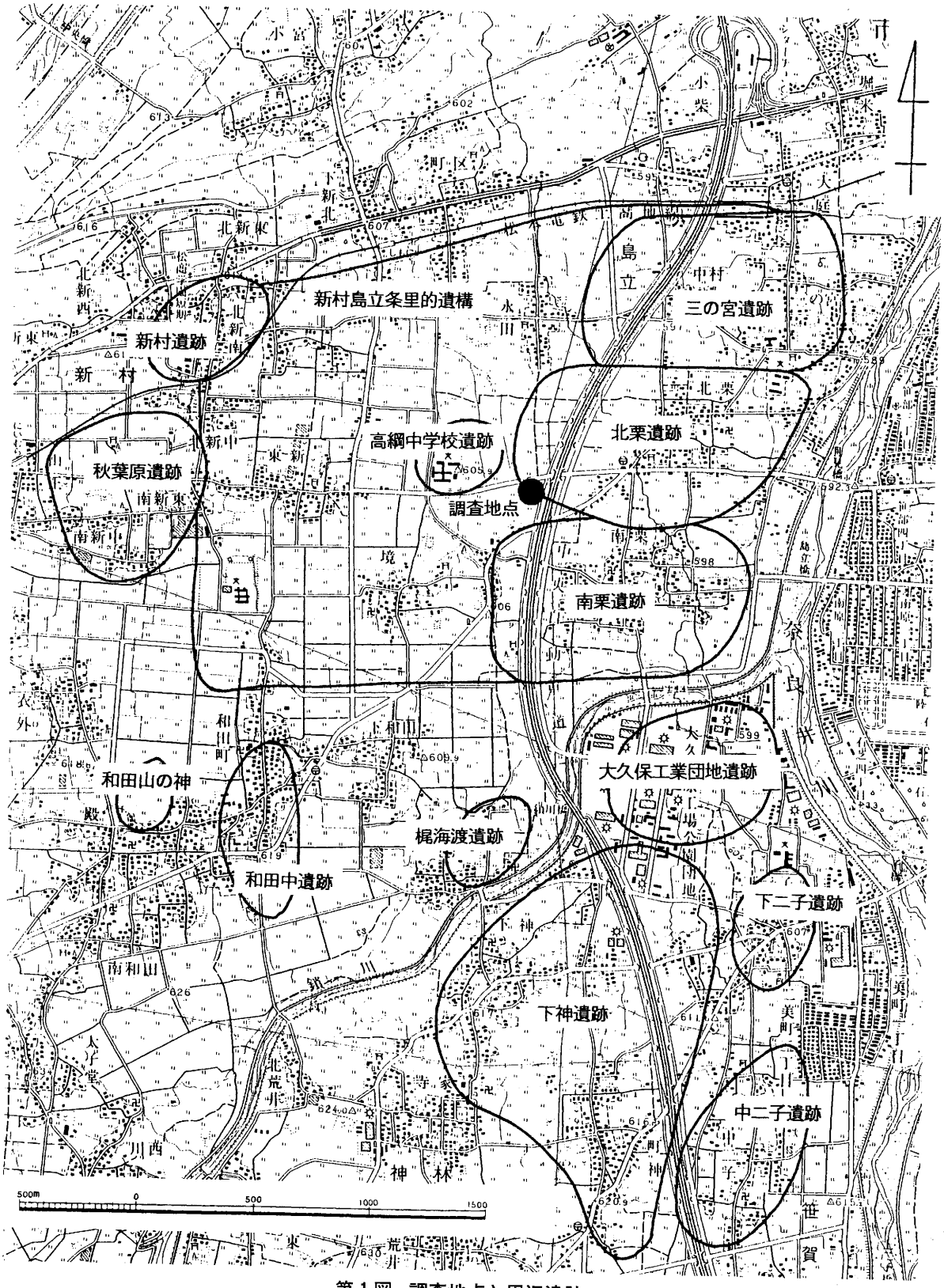
2．本調査及び本書の作成は松本市より委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団（松本市立考古博物館）が担当した。

3．本書の執筆は三村竜一、久保田剛が中心となり行なった。

4．本書作成にあたっての諸作業は下記の者が行なった。

赤羽包子、上條尚美、倉科祥恵、髙山一恵、竹原久子、堤加代子、松尾明恵、村山牧枝、市川温、今村克、久保田剛、村田昇司、三村竜一

5．本調査に関する出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。



第１図　調査地点と周辺遺跡

Ⅰ　調査の経緯

1．調査に至る経過

平成3年11月28日、中部電力株式会社長野支店より鉄塔及び送電線の付替工事にかかわる埋蔵文化財の保護について照会があった。島立北栗は、過去に県営ほ場整備事業や長野自動車道建設に関連する緊急発掘調査(1)が行なわれ、多数の遺構・遺物を得た地域である。

今回の場所も遺跡の範囲内（新村島立条里的遺構・北栗遺跡）にあり、前回（S 60年鉄塔№47移設に伴う調査）(2)と同じように遺構が残されている可能性が高いことから、調査の必要性を述べた。これに対して中部電力㈱では埋蔵文化財の保護のためにと、調査の実施を快諾され、平成4年7月13日付で松本市と委託契約を締結した。

松本市教育委員会では工事に先立つ記録保存のための発掘調査を、㈶松本市教育文化振興財団に委託し、松本市立考古博物館が調査・報告書作成を担当することとなった。なお今調査の遺跡名は「北栗遺跡」とした。

註(1)　長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8』
(2)　松本市教育委員会 1986 『松本市島立条里的遺構』

2．調査体制

調査団長　守屋立秋（松本市教育委員会教育長）

調査担当者　高桑俊雄、市川温、今村克、三村竜一

協力者　青木雅志、赤羽包子、浅輪敬二、飯沼忠、五十嵐周子、池田穂積、大谷成嘉、大谷房夫、大月みや子、大月八十喜、大堀一男、小野光信、神田栄次、粂井まさ、粂井益子、小島茂富、鈴木なつ江、瀬川長廣、高橋登喜雄、髙山一恵、中島新嗣、中島治香、藤井道明、藤本利子、藤森寿々子、藤森久子、丸山惠子、丸山久司、丸山隆香、三沢元太郎、村田昇司、村山恵美子、甕國成、百瀬縫代、百瀬典子、百瀬二三子、横山仁、横山真理、吉江和美、吉田勝、米山禎興

事務局

市教育委員会：島村昌代（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）

㈶松本市教育文化振興財団

：深澤豊（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

考古博物館　：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚、関沢聡（主任）、久保田剛（主事）、藤原美智子

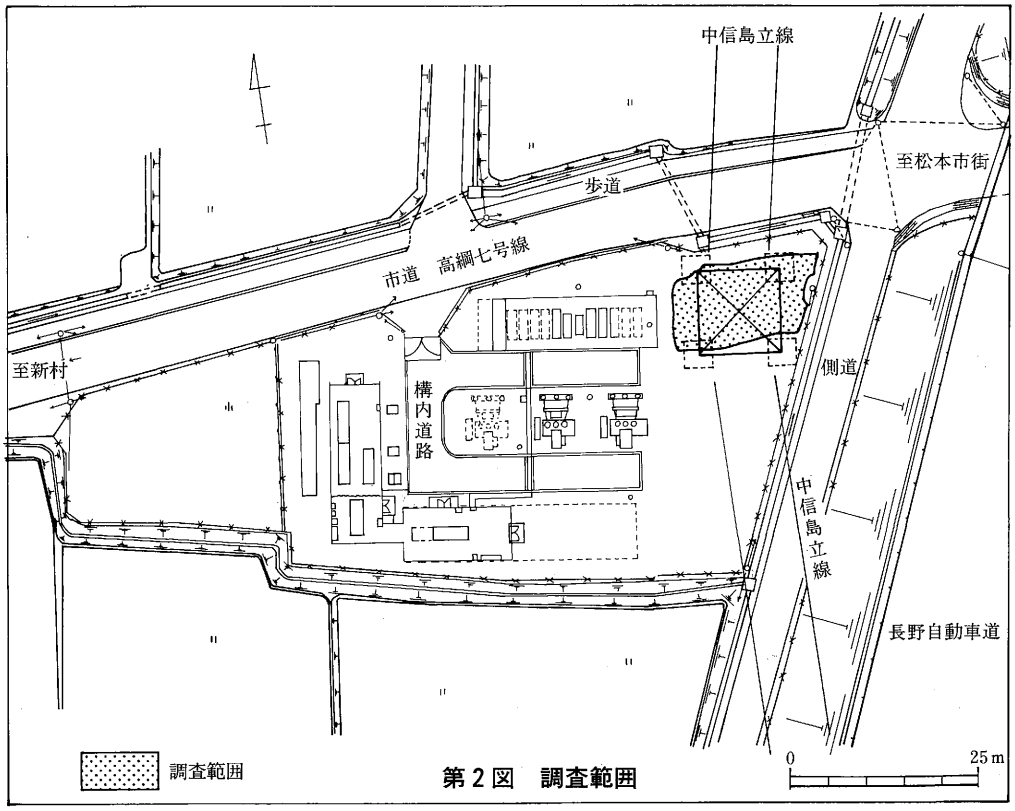
II　遺跡の環境

島立地区は松本市の西方に位置する。地形的には梓川と鎖川が形成した扇状地上にあり、東側は奈良井川によって区画される。これら河川による肥沃な土壌は主に水田として利用されてきた。

今回の調査地点は周知の北栗遺跡の西端にあたり、昭和60年に同様の事業で発掘調査を行なった箇所である。また条里的遺構という広範囲にわたる遺跡の一部でもあり、過去の発掘調査においては奈良から平安時代にかけての竪穴住居址のほか、多くの遺構が発見された地域である。

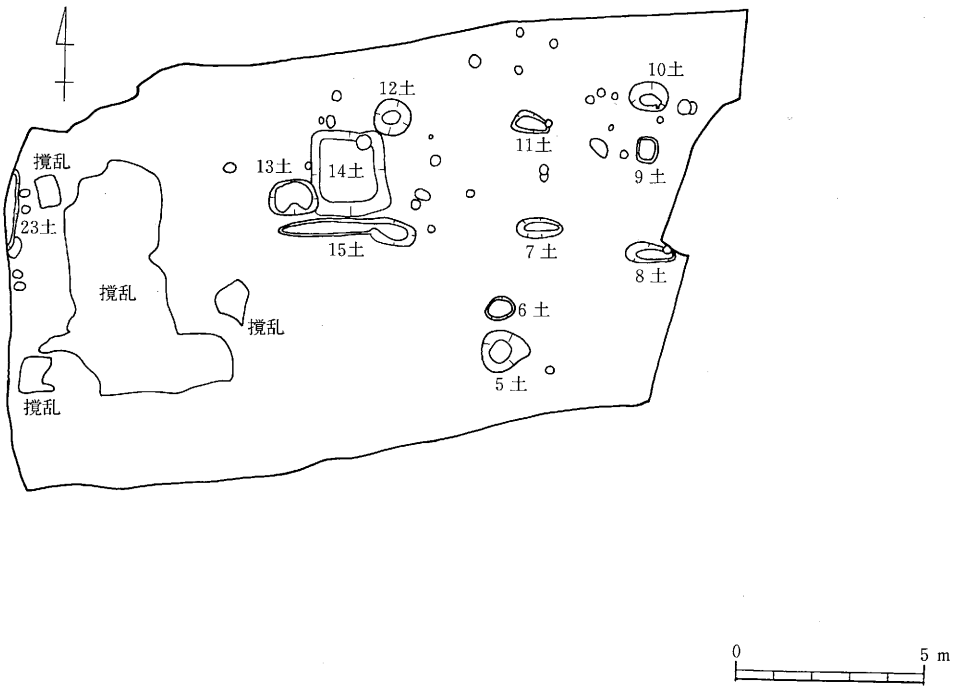
III　調査の概要

調査地の現況は畑地であり、表土の削除は建設用重機（バックホー）を使用した。遺構検出面は2面あることが、前回の1次調査の結果判明していた。第1検出面は、耕作土と旧水田面と考えられる灰色土を削除した茶褐色土層の上面で、現地表面下21～33㎝、第2検出面は、茶褐色土層下の黄褐色土層の上面で、現地表面下45～60㎝である。周囲に排土置場が確保できなかったため、まず調査地の東半分を行い、その後西半分を調査した。確認された遺構は第1検出面に土坑12個、ピット35個、第2検出面に竪穴住居址1軒、土坑9個、ピット54個、溝1本である。

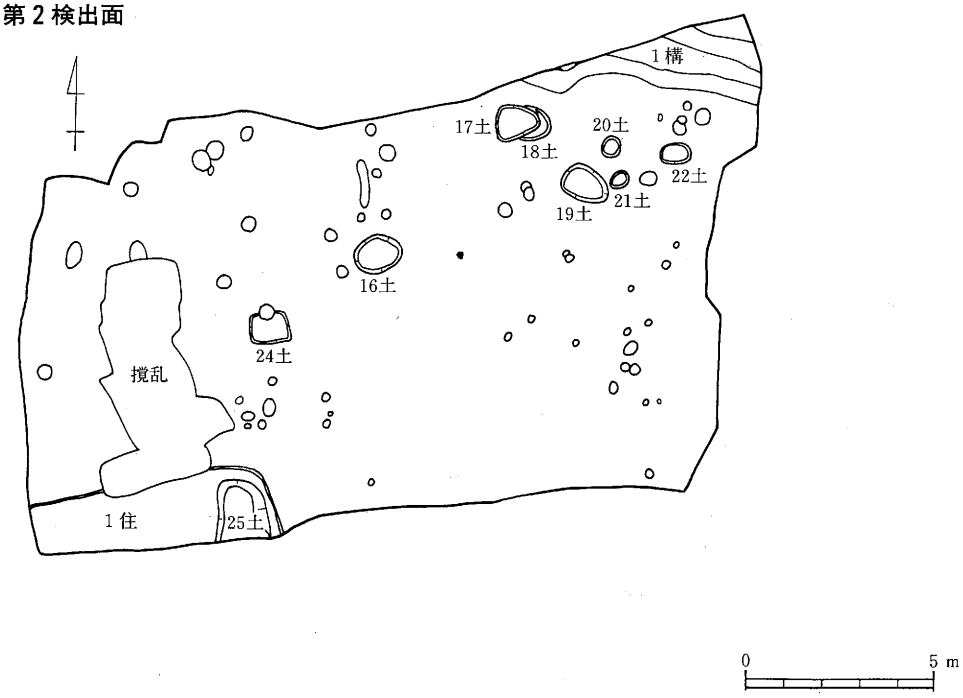


第2図　調査範囲

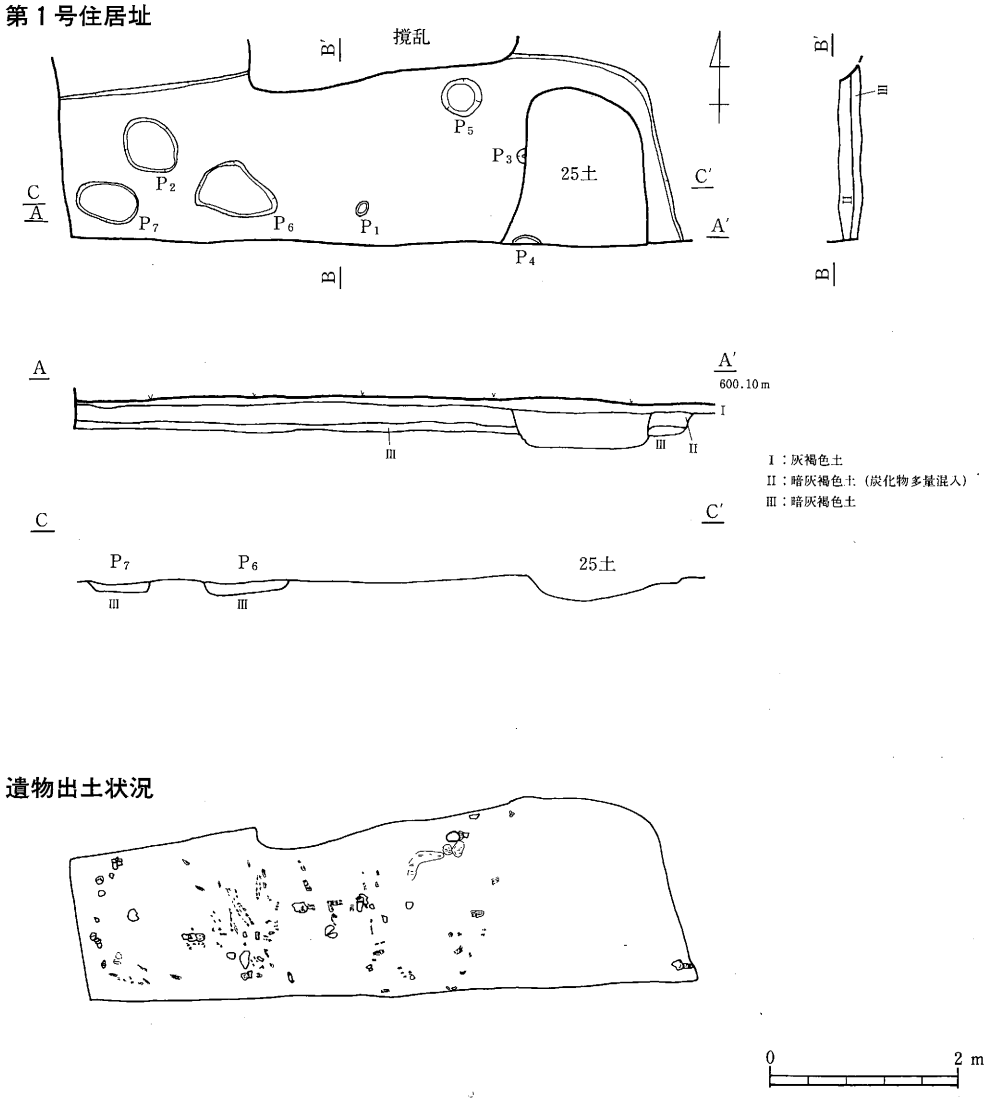
第１検出面



第２検出面



第３図　遺構配置



第４図　第１号住居址

Ⅳ　遺　　構

１．住居址（第４図）

遺構　今回の調査では第１号住居址のみ検出された。第２検出面の南西隅に位置し、僅かに北壁際を約２ｍの幅で検出したに過ぎない。このため住居址の大部分は調査区域外に続いている。規模・平面形についてはわからず、カマドは調査区域外にあると考えたい。黄褐色土の床面は、平坦・堅固であった。覆土は暗灰褐色土、灰褐色土の順で堆積している。暗灰褐色土中には多量の土器・鉄

製品と共に長さ10㎝程の炭化材が床面よりやや浮いて、同じ深さに散在していた。本址は遺物の在り方からみて、焼失した住居址の可能性が高い。

遺物　比較的多く出土した。土器と鉄器がある。土器には土師器の杯を中心に灰釉陶器の椀等がある（第7図）。鉄器には紡錘車、轡などがある（第8図）。本址の所属時期は、遺物よりみて中央道長野線報告編年(1)の14期と考えたい。尚、本報告の時期区分についてはこれに従う。

註(1)　㈶長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道　長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』

2．土坑（第5・6図）

今回の調査では単独の穴で、長径が50㎝以上のものを土坑、それ未満のものをピットとして扱い、土坑についてはすべてを図示した。第1検出面では12個、第2検出面で9個、合計21個の土坑が確認された。規模は長径で最小50㎝（第20号土坑）、最大362㎝（第15号土坑）を測り、100㎝前後のものが多い。以下特徴的な第25号土坑についてのみ記述したい。

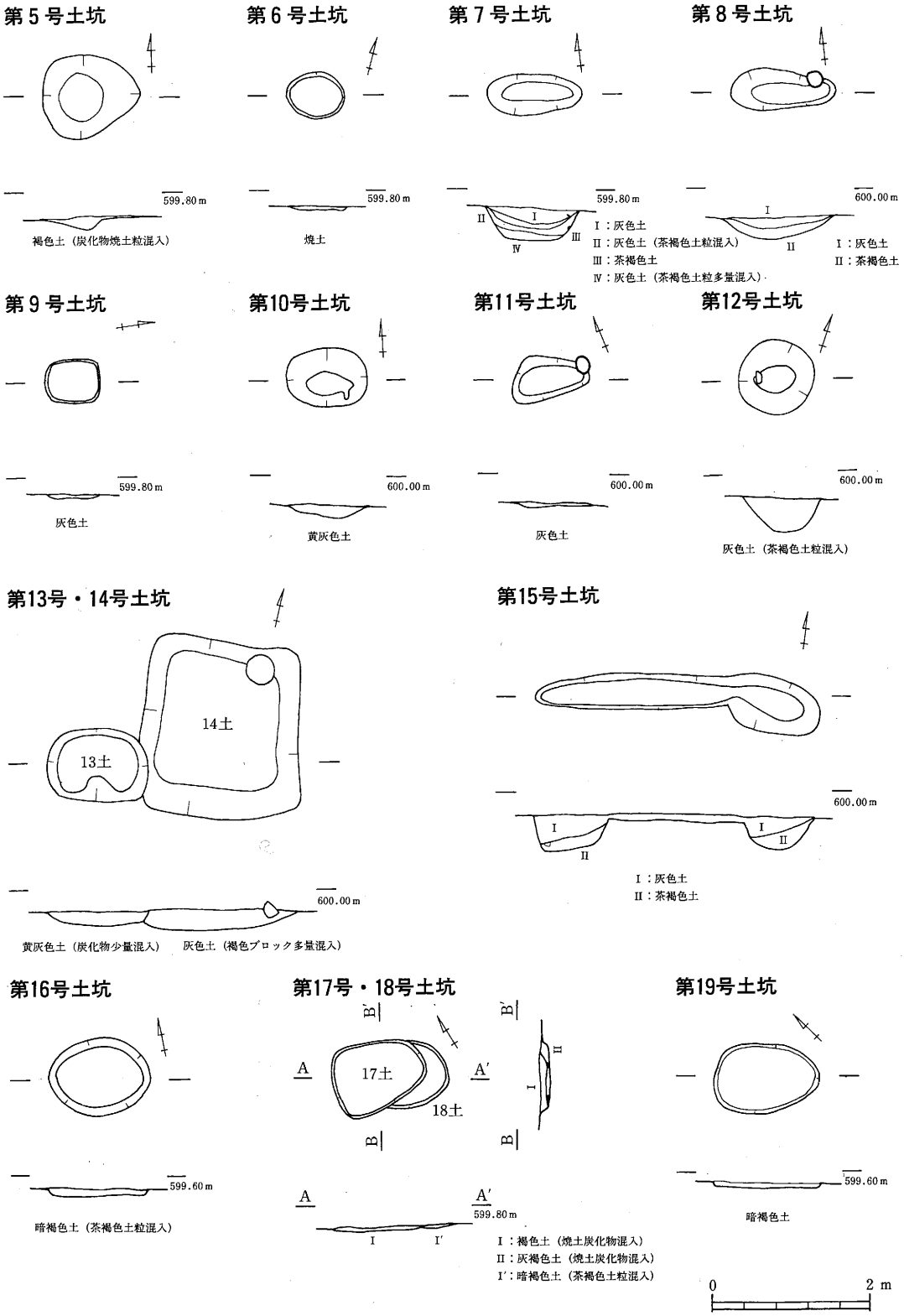
第25号土坑

第2検出面の南西部、第1号住居址の覆土中に検出され、床面下まで掘り込まれていた。南側は調査区域外に続いている。平面は南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられ、調査部分での規模は、南北 164㎝、東西 152㎝である。覆土は8つに分層され、上層には焼土粒・炭化物・黄褐色土塊が混入する灰褐色土、下層には灰色粘土層・炭化物層があり、特徴的な土層といえよう。遺物出土状況は覆土上層には土器と直径10～20㎝大の礫が比較的多くみられ、下層にはほとんどない。また西壁に沿った形で長さ112㎝の炭化材が認められた。遺物は比較的多く、土師器を中心に灰釉陶器も認められる（第7図）。所属時期はこれらの遺物よりみて、第1号住居址と同じく14期と考えたい。

3．溝址（第6図）

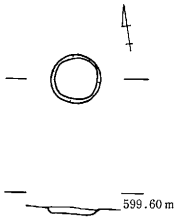
今回の調査では第1号溝址1本が第2検出面の北東隅に検出された。しかしながら確認部分は溝全体のごく一部で、西・東は調査区域外に続いており、詳細はわからない。規模は幅 156～172㎝、長さは6.8ｍ以上である。覆土は灰色砂、茶褐色土、灰色土の順に堆積しており、水を伴っていた可能性が高い。断面は皿型を呈し、底面の深さから流れの方向は東→西に向かっていたとわかる。遺物の出土状況は最下層の灰色砂層から10～20㎝大の礫と共に土器が出土している。土器はいずれも小破片のため図化し得なかった。土師器を中心に須恵器、内耳鍋、青磁があり、これらの土器より所属時期は中世以降と考えられる。尚、中央道長野線建設工事に伴う発掘調査(1)で確認されたSD 59とは位置的にみて、1つの遺構の可能性が考えられる。

註(1)　㈶長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道　長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書8－松本市内その5－北栗遺跡』


第5号土坑
599.80m
褐色土（炭化物焼土粒混入）
第6号土坑
599.80m
焼土
第7号土坑
599.80m
Ⅰ：灰色土
Ⅱ：灰色土（茶褐色土粒混入）
Ⅲ：茶褐色土
Ⅳ：灰色土（茶褐色土粒多量混入）
第8号土坑
600.00m
Ⅰ：灰色土
Ⅱ：茶褐色土
第9号土坑
599.80m
灰色土
第10号土坑
600.00m
黄灰色土
第11号土坑
600.00m
灰色土
第12号土坑
600.00m
灰色土（茶褐色土粒混入）
第13号・14号土坑
13土
14土
600.00m
黄灰色土（炭化物少量混入）
灰色土（褐色ブロック多量混入）
第15号土坑
600.00m
Ⅰ：灰色土
Ⅱ：茶褐色土
第16号土坑
599.60m
暗褐色土（茶褐色土粒混入）
第17号・18号土坑
17土
18土
599.80m
Ⅰ：褐色土（焼土炭化物混入）
Ⅱ：灰褐色土（焼土炭化物混入）
Ⅰ′：暗褐色土（茶褐色土粒混入）
第19号土坑
599.60m
暗褐色土
0
2 m

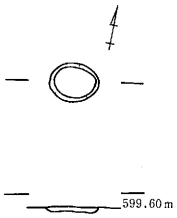
第5図　土坑(1)

第20号土坑



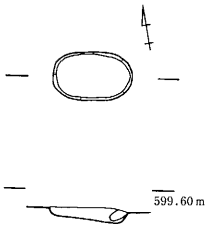
暗褐色土

第21号土坑



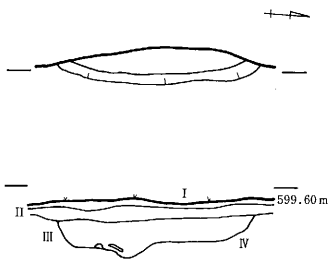
暗褐色土（黄褐色土粒混入）

第22号土坑



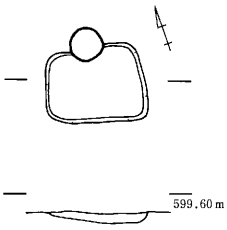
暗褐色土（黄褐色土混入）

第23号土坑



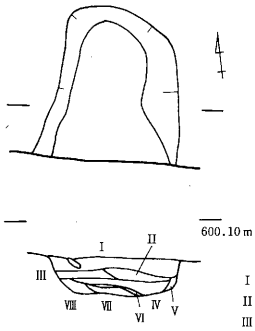
Ⅰ：耕作土
Ⅱ：灰色土（黄褐色土粒混入）
Ⅲ：灰色土（茶褐色土塊多量混入）
Ⅳ：茶褐色土（黄褐色土粒混入）

第24号土坑



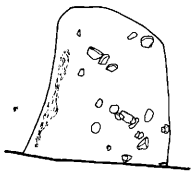
黄褐色土（黒褐色土塊混入）

第25号土坑

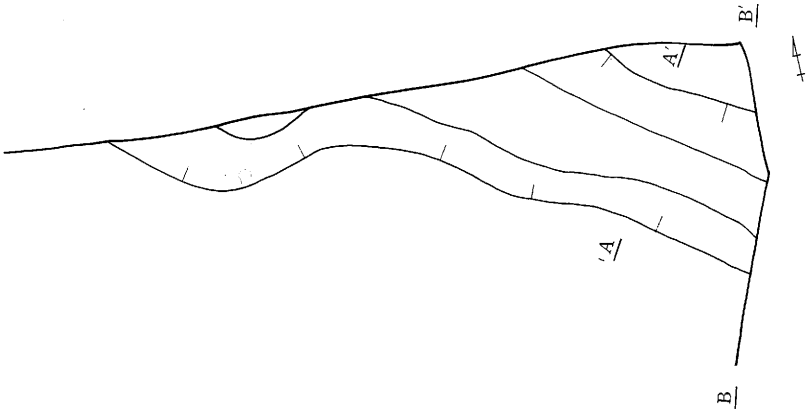


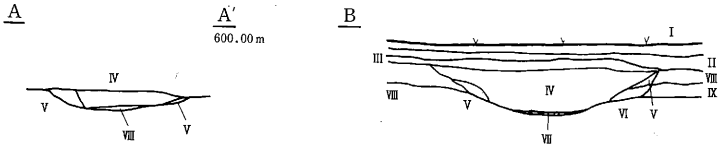
Ⅰ：灰褐色土（焼土粒少量混入）
Ⅱ：灰褐色土（焼土粒・炭化物多量混入）
Ⅲ：灰褐色土（焼土粒炭化物混入）
Ⅳ：灰褐色土（黄褐色土塊混入）
Ⅴ：灰褐色土
Ⅵ：炭化物層
Ⅶ：灰色粘土
Ⅷ：灰褐色土（茶褐色土粒混入）

遺物出土状況



第１号溝址





Ⅰ：耕作土
Ⅱ：灰色土（黄褐色土粒混入）
Ⅲ：灰色土（茶褐色土粒多量混入）
Ⅳ：灰色土（茶褐色土粒微量混入）
Ⅴ：茶褐色土
Ⅵ：茶褐色土（暗褐色土粒混入）
Ⅶ：灰色砂（小礫⌀２～５cm混入）
Ⅷ：茶褐色土（黄褐色土粒混入）
Ⅸ：黄褐色砂質土

0　2 m

第６図　土坑(2)、溝址

V 遺　　物

1．土器（第7図）

今回の調査では整理用コンテナ1箱分の土器が出土し、25個体を図化提示し得た。時期的には1点を除きいずれも平安時代に帰属するものである。以下時期毎に概観する。

弥生時代終末～古墳時代初頭の土器

25は、第2検出面北西部より出土した甕である。波状紋の範囲が狭く、頸部の簾状紋を欠如する点、胴部下半および内面のミガキがみられない点等に新しい要素を認め、本時期の所産と判断した。

平安時代の土器

第1号住居址及び第25号土坑の出土品が該当する。器種・器形は、土師器杯A（2～8、19～24）・皿A（9、10）・盤B（1）、黒色土器A椀（11、18）・小形の鉢（12）、灰釉陶器椀（15～17）・皿（13）・稜皿（14）がある。これらの帰属時期についてみると土師器杯Aや黒色土器A椀に小形化が認められ、土師器皿A・盤B等の特徴的な器形が加わる点、さらに伴出する灰釉陶器の諸特徴から14期の内容に相当するものと考えられる。（竹原久子）

2．金属製品（第8図）

総計21点の鉄製品が出土し、このうち13点を図示した。

第1号住居址出土遺物（1～8）

紡錘車（1）輪部のみで、径5.4cmを測る。**鏃**（2）雁又鏃である。刃部、篦被部まで残り長さは8.3cmある。**馬具**（3・4）3はS字状の形状を示し、一端に別のV字状の金具が接続している。用途ははっきりしないが馬具として扱った。4は轡である。この轡は左右の形状が異なるものを連結している点が最大の特徴である。鏡板の一方は一本の細長い鉄を輪状に曲げて中央で8字状になる。こちらの引き手は捩りのない一本の引き手がつく。もう一方は環状で、捩った引き手の一部を8字状に作り環状の鏡板に接続している。銜は全長15.8cmだが、左右の長さが異なっている。鏡板の径は8.7cmで左右ほぼ同じである。**釘**（5）先端部を欠く残存長8.0cm。**刀子**（6・7）茎部のみで、6は長さ3.4cm、7は3.8cmである。**不明品**（8）L字状に曲がる。断面は四角形である。

第25号土坑出土遺物（9・10）

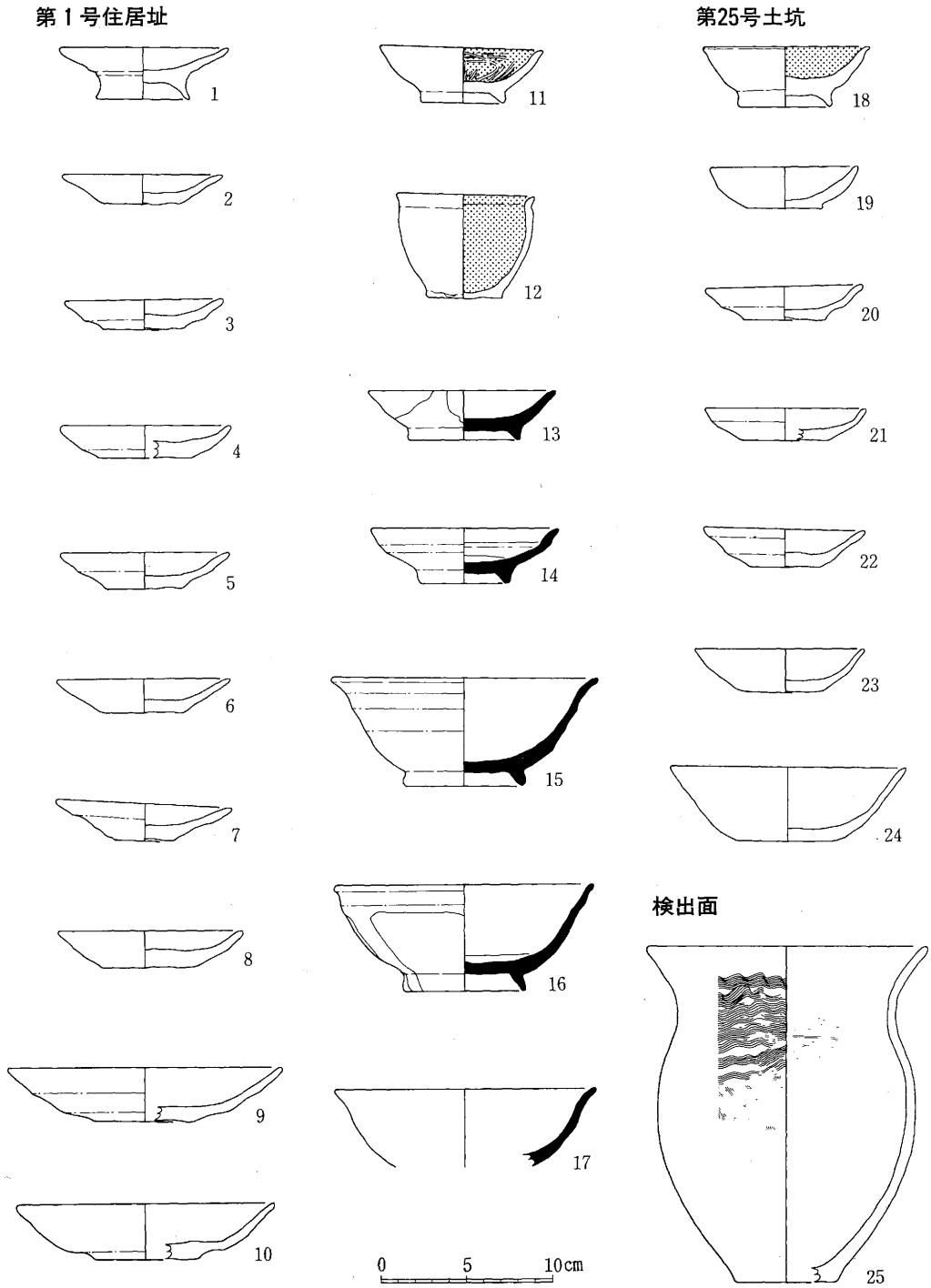
大型刀子或いは短刀（9）刃部先端である。時期の特定は難しい。**釘**（10）角釘の先端部分と考える。

第1号溝址出土遺物（11・12）

紡錘車（11）棒軸部分で断面は丸い。長さ9.3cmである。**不明鉄製品**（12）釘とも思われるが判然としない。断面は四角形である。

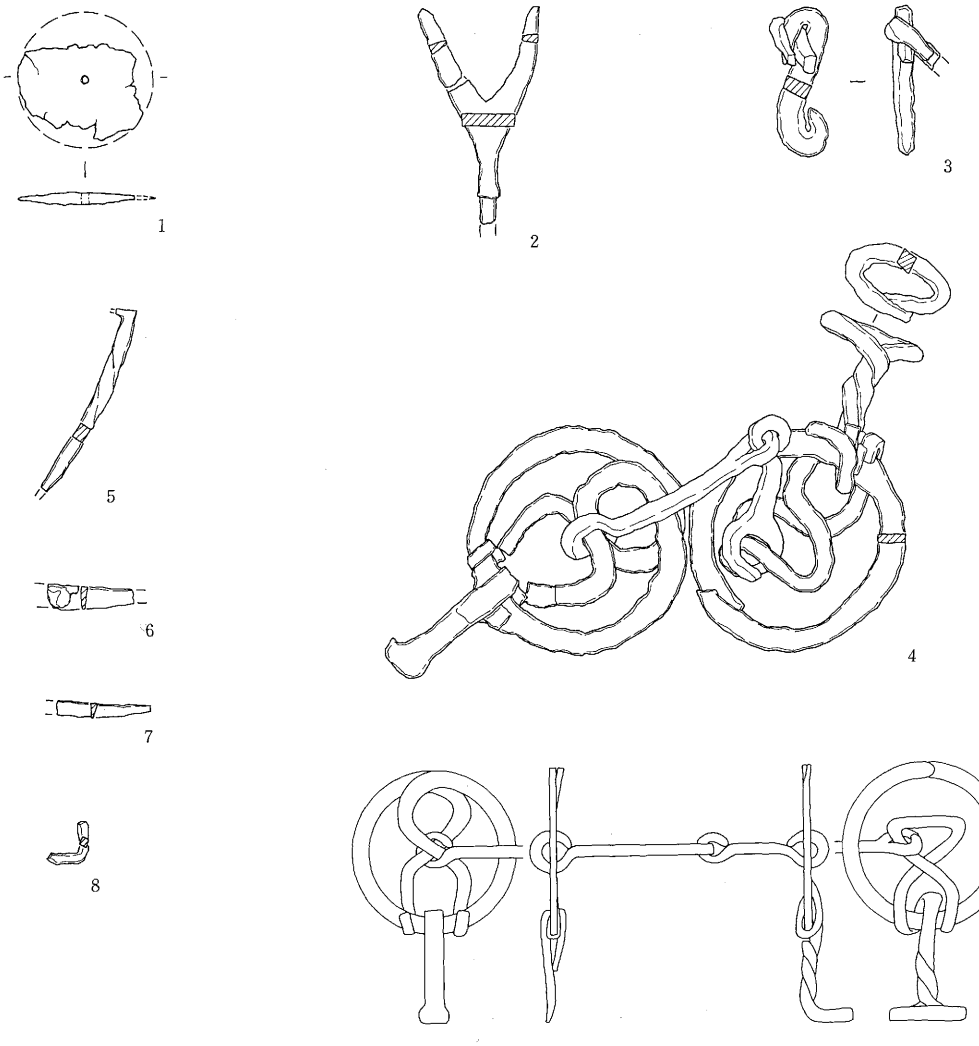
第2検出面（13）

鉄製品（13）がある。釘と考えられ長さ6.8cmである。（今村　克）


第１号住居址
第25号土坑
検出面
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
0
5
10cm

第７図　土器実測図

第１号住居址

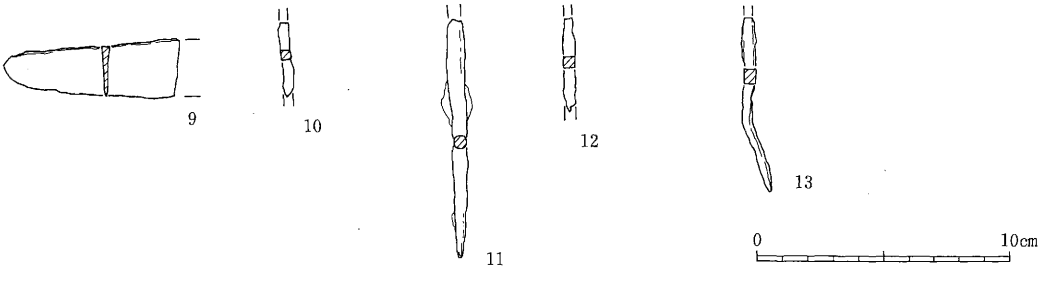


轡構造模式図

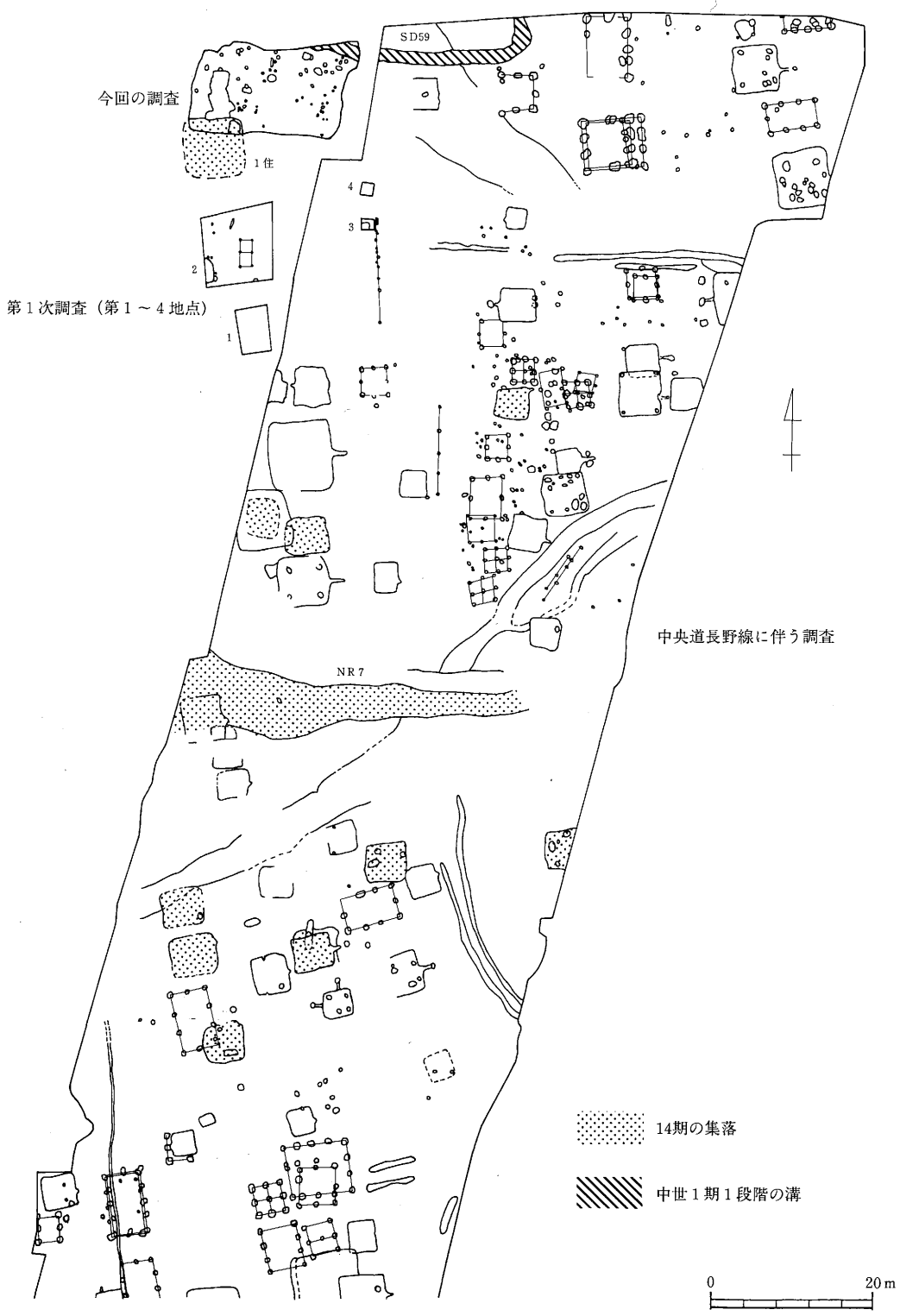
第25号土坑

第１号溝址

第２検出面



第８図　金属製品実測図


今回の調査
1住
第１次調査（第１～４地点）
SD59
NR7
中央道長野線に伴う調査
14期の集落
中世１期１段階の溝
0
20m

第９図　周辺の遺構配置

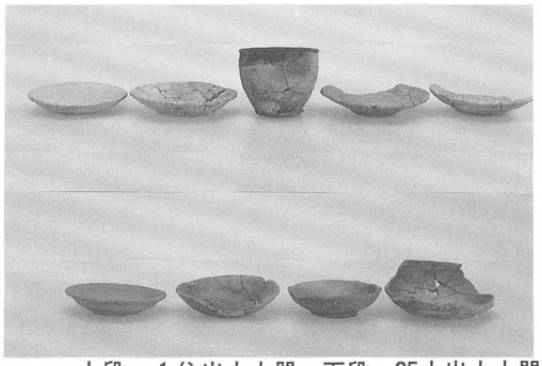
Ⅵ　ま　と　め

今回の調査成果に第１次調査と長野線の建設工事に伴う調査の成果を合わせてみると、北栗遺跡は縄文・弥生時代、古代、中・近世に亘る集落遺跡といえる。今回の調査地の約 60 m南には東流する自然流路（NR7）に水を依存していたと思われる 14 期の遺構群があり、第１号住居址もこれを構成する遺構の１つと考えたい。遺物については前項で述べているが、住居址からの馬具の出土は極めて希であり、今回の調査の最も大きな成果と言えよう。

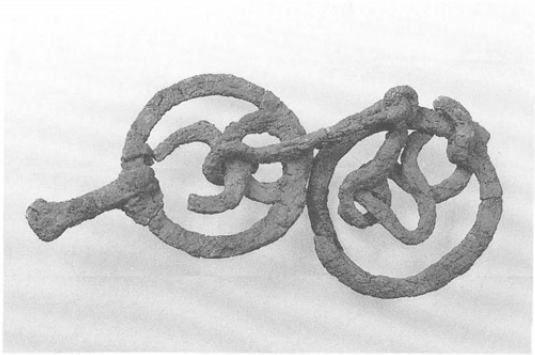
第１号住居址　遺物出土状況

第１号住居址

第25号土坑



上段　１住出土土器　下段　25土出土土器



金属製品

同

松本市文化財調査報告　No.109

松本市北栗遺跡

平成5年3月22日　印刷
平成5年3月22日　発行
編集　松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
Tel 0263(34)3000
発行　松本市教育委員会
印刷　川越印刷株式会社